報告番号	※　　　第　　　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	新たな聴衆層の誕生 1980 年代日本におけるマーラーブームの事例から
氏　　名	小沢　誠

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、クラシック音楽愛好家たちのあいだでさほど注目を集めていなかったグスタフ・マーラーとその楽曲が、1970 年代以降に演奏回数が急激に増加し、1980 年以降にブームを迎えた事実に注目し、その要因を「新たな聴衆層の誕生」という観点から読み解こうとしたものである。具体的には、（１）マーラーが普及する環境条件の整備、（２）聴衆と音楽の聴き方の変化、（３）音楽関連メディアの活動とその役割、の３つの視点から資料の提示と考察をおこなった。その際、聴衆層という社会集団を分析する概念上の枠組みとして、ピエール・ブルデューによる「界」概念を参照した。

第１章ではマーラーの音楽はワーグナーの大規模な音楽的性格、思想性の強い性格を継承しながら、聴き手と作曲家が対話するような親しみやすさ、自由さを併せもち、こうしたマーラーの音楽の性格がマーラーの普及を促進したことを述べた。

第２章では日本の社会環境の急激な変化が音楽の聴き方の変化を起こし、マーラーの音楽への関心の増加の背景となったことを述べた。日本の社会状況、音楽情勢について明治期に遡り記述した。明治政府による急激な西洋音楽導入により戦前にはベートーヴェンを中心としたクラシック音楽の聴衆層が形成されており、学生、知識人を中心に教養主義が形成された。このことが戦後のクラシック音楽の急速な普及の基礎となった。戦後労音活動、鑑賞教育などによりクラシック音楽が広い階層に普及した。

また、ＬＰレコード、ＦＭ放送、高性能オーディオからミニコンポの普及によるオーディオの急速な普及など、戦後複製音楽にかかわるインフラが急速に整備され、クラシック音楽の普及の基礎となった。同時に戦後の高度成長の中で社会環境の不安定化も進行しており、１９７０年以降に顕在化した。大衆化の進行によりベートーヴェン中心のこれまでの鑑賞方法の見直しが必要となった。戦後これまでクラシック音楽の中心であっつたベートーヴェンの演奏回数が頭打ちなのに対し、古典音楽の中ではモーツァルトの演奏回数が急増し、マーラーの演奏回数も急増している。

第３章では、大衆化の進行は戦前からの伝統であった教養主義を衰退させ、古典音

楽とは異なる音楽を求める声が強くなり、マーラーの音楽に関心がもたれるようになった。その一方、ポピュラー音楽も含め、団体的な音楽の聴き方から個人的な聴き方への移行という音楽の聴き方の大きな変化が生じたことを論じた。

第 4 章では、マーラーの楽曲とマーラーの思想が、1980 年代の日本において急激に人気を集めた要因について、序文で示した 3 つの視点から検討した。

まず、マーラー普及に直接かかわる戦後特有の社会変化として、1）社会環境の変化—中間層の衰退と大衆化、すなわち、第二次大戦後しばらく続いた高度成長の中で次第に社会の不安定化が発生したこと、1970 年以降は大衆化の進行とそれに伴う中間層の衰退という形で顕在化してきたことを指摘した。また、2）音楽の聴き方の変化と複製音楽の普及、すなわち、戦後の社会環境の変化の一環として、集団的聴取を特徴とするこれまでの音楽の聴き方から各自が個室で聴く「個人的聴き方」へと音楽の聴き方が変化したこと、これらは、CD の普及と音楽機器の高性能化があって初めて可能となった出来事であっったことを指摘した。

次に、聴衆と音楽の聴き方の変化については、1）教養主義の衰退、すなわち 1960 年以降中産階級が衰退し、ブルーカラー、自営業、農民も含んだ新中間社会に移行すしたが、これにともなってクラシック音楽はもはや自分を向上させるという存在ではなくなり、ベートーヴェンを中心とする最終楽章での課題を解決する古典音楽の形式に違和感を感じ始めたことが指摘できた。これと並行して、2）孤独な環境の中での音楽聴取というあり方が増加し、マーラーの音楽はこうした孤独な環境下で作曲者と聴き手が直接対話したいという日本の聴衆の欲求にかなう楽曲と思想性を備えていたことを指摘した。

そして、メディアの活動とその果たした役割に関しては、海外講演の放送のほか、国内外の研究家によるマーラー研究関連書籍の紹介、マーラーの音楽や思想性をテーマとしたシンポジウムの開催、音楽雑誌でのマーラー特集記事の掲載など、この時期に盛んな活動がみられ、これらもマーラーブームを後押ししたことを指摘した。さらに、この時期から映画、ＴＶなどを通じて、マーラーの音楽は多くの人が日常的に接することのできるものとなり、このことは従来のクラシック音楽愛好家以外の聴衆層の形成に寄与した可能性がある。1980 年以降、多くの映画でマーラーの音楽が使われるようになり、日本映画でもマーラーの音楽が使われるようになった。加えて、1980 年代にはテレビコマーシャルでもマーラーの音楽が使用されるようになり、とくにクラシック愛好家ではないテレビ視聴者にとってもマーラーは身近な存在となり得た。

以上の記述と考察から、本論文はマーラーブームの要因を次のように結論づけた。1970 年代以降、社会状況の変化とともにクラシック音楽愛好家の嗜好も変化し、それまで主流とされてきたベートーヴェンの克己型、課題解決型の音楽を正しく聴取し理解することで自己を高めるという聴き方ではなく、個人の内面と向き合い、癒しを求

めるような聴き方に変貌した。他方で、こうした音楽の聴き方は従来のクラシック音楽愛好家以外の層にも普及した。

1970 年代には戦前から続く教養主義の流れを汲む愛好家集団がまずマーラーに関心を持つようになり、１９８０年代からはこれまでの愛好家集団とは異なる新たな集団が発生したと考えられる。戦後のマーラーの普及はまず戦前の教養主義の流れをくむクラシック音楽のマニア層から始まり、徐々にクラシック音楽の初心者やクラシック音楽以外の愛好家にまで層を拡大した。このグループは出身階級に拠らない愛好家集団であり、それまでのベートーヴェンを代表とするクラシック音楽愛好家層とは明らかに異なる、新たな「界」ということができる。

そして、CD やステレオセット、FM エアチェックなどの普及が、かつてないほどの高音質によるマーラー聴取を可能にした。これによってマーラーが意図した音響が初めて再現されただけでなく、聴衆がマーラーの音楽をより詳細に、より深く、何度でも繰り返し聴くことを可能にした。すなわち、聴衆があたかも個人的にマーラーと対話するような聴き方をすることが可能となったことも、マーラーブームを読み解くうえで看過できない重要な要因であることを指摘した。